

### はじめに

本稿は2020年2月1日に立教大学で行われた公開シンポジウム「アジアの海を渡る人々—18・19世紀の渡海者」（代表=上田信・立教大学教授の「科研共同研究報告会」）での口述発表をもとに、『なじまあ』の小論として書き下ろしたものである。この小稿では個別テーマの詳細な史実の検証ではなく、近年のアルメニア史研究の現状と課題について概要を紹介したい。

これまで、研究報告や講演などでアルメニア商人について話す機会があった。そこでは決まって次のような質問がでる。「アルメニア社会とはアジアかヨーロッパか?」「アルメニア民族はアジア人かヨーロッパ人か?」…そのあとにたいてい「単純な質問ですが」とひとこと加えられる。このような質問が出ると私は応答に窮して立ち往生する。それは私がアルメニア民族や文化あるいはアルメニア民族史の専門研究者ではなく、アルメニア語も20数年前の独習が頓挫したままで、要するに専門領域の知見がないからだ。それとともに、「単純な質問」ほど「深い分析と明晰な説明」が求められるのだが、そのような能力は自分にはないからでもある。

つい最近のこと、複数のアルメニア人—一人はアルメニアの首都エレヴァンの民俗学研究所の研究員、もう一人は彼よりずっと若い近代史研究者—に同じ質問を投げかけた。お二人の反応はいともそっけなかった。「海外でもよく訊かれる質問だけど、実は我われにもよくわからな

い。だから明確には答えられない」と。私はこの反応に一安心した。「単純な質問」だが「一言で説明できるほどの明確・明晰な分析・解釈」はまだ確立していないのだと。

ところで、このような総論的で難しい質問ではなく、私個人のアルメニア研究への関心・動機を問われることがある。この点については、すでにいくつかの論著やエッセイ(重松1993; 2012; 2016; 2017; 2019)で触れた。繰り返すことになるがその回答はこうである。インド移民の調査を行う中で、ベンガル湾域からマラッカ海峡や南・東シナ海の海域をたどってゆくと、沿岸港市の各地に「アルメニア通り」や「アルメニア人名の施設」「アルメニア教会やその墓地」「アルメニア関係の史跡」にぶつかる。また東インド会社史料や航海記を通読すると、随所に「アルメニア人」があらわれる。「アルメニア人とはいったい何者?なぜここに?」。その疑問が出発点であった。

さて、アルメニアといえば、民族固有のあるいは他の民族との歴史的経緯や、彼らの足跡あるいは世界史の中の位置づけについて体系だって論じている人は、海外・国内を通じてそう多くはない。それは専門研究者や一般の人びとを問わない。

しかしまた、アルメニア民族についてある種独特な「イメージと言説」が世界で広く知られていることも事実である。アルメニア民族に対

するラベリングあるいはタグ付けともいえよう。そこからまず切り出したい。

## 1. アルメニア人にまつわる「イメージと言説」とは

### 1-1. ジェノサイドとスピュルク

是非虚実とは別であるが、どの国や民族にも独特のイメージが付きまとう。少なくとも近代史におけるアルメニア民族といえば、その強烈なイメージは「ジェノサイド」だろう。ジェノサイドとは、大規模な民族的抹殺である。その被害者であるアルメニア人の人数や歴史背景とは異なるが、民族の抹殺(それは直接的な殺戮には限らない)という点ではユダヤ人に対するホロコーストとほぼ同義である。このジェノサイドについては国連報告書や欧米各国の批難決議文、調査報告書がすでにいくつか公表されている。これらの紹介も含めてジェノサイドの実態・背景・論争について松村論文(松村 2007)が詳細に論じているので、是非読んでいただきたい。ただ史実・人数・動機・国際的対応については共通の認識に達していない部分もあり、いまだに歴史的分析、つまり「過ぎ去った時代の客観的な研究テーマ」としてではなく、生々しい今日的課題として論争が続いている。

史実の学問的検証とは別だが、我われに大きなインパクトを与えたのは映像である。私はこれまで3作品しかアルメニア人ジェノサイドを主題とした映画を観ていないが、そのうちの2作品「アララトの聖母」(図1)と「消えた声が、その名を呼ぶ」(図2)は静かな激しさをもって今も迫ってくる。



図1. 「アララトの聖母」ポスター

「アララトの聖母」はアルメニア系カナダ人監督、アトム・エゴヤンの作品(2002)で、民族のトラウマとしてのジェノサイドを、現代アルメニア人青年のいわばルーツ探しのフラッシュ・バックを通して描いている。激越な批難も声高な主張もなく、残酷な情景も苦悩の葛藤もひたすら静謐を背景に描かれている。だが映画の主題となる絵画の中のアララトの聖母とはいったい何者なのか、唐突にはあるが私は遠藤周作の「沈黙」の神、イエスを連想する。



図 2. 「消えた声、その名を呼ぶ」ポスター

「消えた声、その名を呼ぶ」(2012 公開)(図 2)は、トルコ系ドイツ人監督ファティ・アキンによるオデュッセイア物語である。虐殺をかわり免れたが声帯を切られて声を奪われた一青年の、トルコ・シリア(アレppo)・レバノン・キューバ・フロリダ・ノースダコタ…をたどる生き別れた娘を探す旅である。オデュッセイアとはいえ、活劇も絶叫もない。作品はカラーだが主調はモノトーンである。静謐の中にひたひたと迫ってくる民族の孤独がこの映画に通底している。

19 世紀末から 20 世紀初頭にかけて、数度にわたって発生したジェノサイドはアルメニア人に「離散」(アルメニア語のスピュルク spyurk)」を強制した。離散は必ずしもジェノサイドの結果とは限らない。経済上、社会

上の事情から離散が生じることもまた事実である。その一つは、カーティンの「交易離散共同体 Trade Diaspora」のディアスポラ論である。だがこのディアスポラとスピュルクとは根本的に違う。前者では旧アルメニア国のエレヴァン、エチミアジン、あるいはイスファハンの新ジョルファ、また交易経路上の中継都市があり、そこには同朋の宿泊と商品保管庫を兼ねる「フンドック」と呼ばれる施設(在日華僑の寄せ場「行棧」施設とも類似する)があり、アルメニア人はそれらの拠点で同朋に出会い安らげた。本当の意味での「離ればなれ」ではなかった。だが後者のスピュルクには戻るべきあるいは交点となる場はなかった。

## 1-2. 「天性の交易の民」論

アルメニア人は「交易の民」という通説は国際的に広く知られている。しかしブルヌティアンによる膨大なアルメニア通史(小牧監訳・渡辺訳 2016)をよく読めば、アルメニア民族は基本的には「農耕の民」であったと考えられる。では

いったい、いつごろからなぜ、「交易の民」とみなされるようになったのだろうか。

17、18 世紀のフランスやオランダでは、野営するアルメニア商人やアルメニア人像(図 3)が好んで描かれたという。また近代哲学の父と呼ばれる



図 3. アルメニア商人像

の「実用的見地における人間学」では次のよう

なアルメニア民族観が語られている。

「キリスト教の国民であるアルメニア人についていえば、彼らにはある種非凡な商人気質が貫かれていて、中国の国境からギニア海岸のコルソ岬まで徒歩で交易を営んでおり、このことから理知的で勤勉なこの国民はある特定の祖先からの一貫した末裔であることが窺えるのである」(渋谷・高橋訳 2003 : 309)。

「ある種非凡な商人気質」とか「中国の国境から(アフリカ)ギニア海岸のコルソ岬(!)まで」とか「ある特定の祖先からの一貫した末裔」といったカントの「天賦商人気質論」の断定的な見方が、いったいどのような史料や客観的史実に裏付けられているのか、どうもこのあたりの検証は哲学者や歴史家によってもいまだに行われていないようだ。ともあれ、カントの見解がアルメニア人=交易の民論の一つのきっかけになったのかも知れないし、あるいはそれ以前からの通説にお墨付きを与えたのかもしれない。

歴史地理的な条件でいえば、一般に土地が狭く痩せて農耕には適さず、人口稠密で生計を維持するには不十分で、しかも取り立てて産業もない土地では、人々が生存するには出稼ぎか交易か略奪の外はない…一見乱暴な(ある意味で説得力のある)見方がある。その点でいえば、アルメニアも例外ではないだろう。しかしアルメニア民族全体がそうだとする見方は雑駁すぎるし、先述したブルヌティアンの主張とも矛盾する。私の推論では、アルメニア高地を基盤とする高地農業では生産力が低く、それを補完し余剰労働力を活用する方便として海外の傭兵となり(17世紀にイギリス東インド会社の傭兵となる

アルメニア人も多かった)、あるいは環地中海域の巡回交易に従事してきたのではないか、つまり複数の補完事業の一環としていわゆる巡回交易が発達し定着したのではないかという見方である。

アルメニア交易史研究はアルメニア研究の他の分野に比べて比較的多い。とりわけ、環地中海世界の陸海接続交易やユーラシア内陸部における中継交易、交易共同体の交易組織・交易商品・交易ルートに関する研究が蓄積され、また、近年は南アジア・東南アジア・東アジア海域における海洋交易の研究も始まりつつある。次にそれらの研究動向を概観したい。

## 2. アルメニア商人は世界を巡る

### 2-1. ユーラシア内陸部の巡回交易商人—近世以前の交易

先述の「交易離散共同体 Trade Diaspora」論とはカーティンの所論である(1984)。「交易離散共同体 Trade Diaspora」とは、北アジア・東欧・南欧諸地域に見られ、一定地域や国内に定留せず、国と国をまたぐ遠隔地を巡回移動しながら広範囲に交易活動を行ってきた商人集団のことであり、その交易活動についてカーティンはいくつかの典型的な事例を紹介し類型化している。

ところで、「交易離散共同体」という用語・概念にはいくつかの検証が必要である。検証の課題だけに限れば、共同体内の組織および共同体間の相互の結びつきのあり方、「離散 diaspora」という状況、「帰巢性」の問題である。「帰巢性」というのは分かりにくいかもしれないが、他の生物、例えば、ウナギ、サケ、クジラなど

を例にとれば、長距離・広域に移動回遊するが、やがては必ず生まれ故郷にもどってくる。在外アルメニア人もそうした本地回帰があったのかどうか。ここでは個別の課題の検証はひとまず置いて、これまでの長距離遠隔巡回交易を概観しておきたい。

18世紀以前のユーラシア内陸部では長期・広域・巡回の隊商(キャラバン)交易がおこなわれていた。その中でもとりわけアルメニア商人による巡回キャラバン交易 *itinerary caravan trade* は特徴的であった。アルメニア人研究者アスラニアンはアルメニア商人の近世交易ルートを次のように描いている(Aslanian2011)

### 2-1-1. <毛皮と銀の交換>による内陸巡回交易—中央アジア～北欧ルート、南アジアルート

アルメニア巡回商人は、カスピ海・ヴォルガ河遡上ルートの北回り回廊、つまり新ジョルファ(イスファハン)～タブリーズ～カスピ海～アストラハン～ヴォルガ川遡上～モスクワ～セント・ペテルスブルグ～北欧(フィンランド・スウェーデン)を巡回した(Bakhchinyan2017)。更にその支脈回廊として、中央アジアの旧来の交易ルートを通じて、ムガル帝国下のラホール～ラクナウ～カーンプル～チンスラーなどインド中央部・ガンジス河畔横断ルート上の都市、あるいは中央アジアからブータンにも拠点を構えた(Moosvi1998)。このような交易は、ロシアのロマノフ朝や北欧の王朝体制、またインドのムガル帝国の権力が強固であることを前提とし、隣接する王朝間の政治関係が緊張関係を持ちつつも安定的である限り持続した。しかし、これらの王朝勢力が衰退するとともに、アルメニア人

の長距離巡回交易も衰退を余儀なくされた。

### 2-1-2. <絹と銀の交換>による内陸巡回交易—地中海・南欧ルート

また、アルメニア商人は、黒海・地中海ルートで南欧・西欧・東欧を巡回する西・北回り回廊、これまで「レヴァント交易」と呼ばれた交易路をほぼ独占していた。そのルートは新ジョルファ(イスファハン)～タブリーズ～エレヴァン(アルメニア)～イスタンブール～イズミル(スミルナ)～地中海～マルタ～リヴォルノ～ヴェニス～ブリュッセル～アムステルダム～アルハンゲリスク～モスクワを巡回する。このルートでは、アルメニア商人はもっぱらイランの絹を商品として、西欧諸国の銀を獲得する交換交易であった(Aslanian2011;McCabe Ina Baghdiantz1999)。

### 2-1-3. ユーラシア内陸・インド洋の循環交易ルート

北回りの内陸巡回交易と西・北回りの内陸巡回交易とはブリュッセルとアムステルダムで接続しユーラシア循環の交易路が結合する。これらの港市が二つの内陸交易路と商品集積の拠点であったと考えられる。だが、そのアルメニア広域商人の交易ルートはここで完結せずに、さらに東方の海に向かって進出する。その進出を強くサポートしたのはポルトガル海洋帝国である。ポルトガル艦隊は胡椒を求め、拠点支配を目指してインド(北西インドのスーラト、南東インドのサントメなど)、東南アジア(マラッカなど)へと長距離航海を行った。他方、アルメニア商人はこの強大な海洋勢力をバックにしつつべ

ンガル湾海域における雑貨・貴金属などの交易を求めた。そうした活動は16世紀初めのトメ・ピレスの『東方諸国記』などに散見する。アルメニア商人はポルトガル艦隊に随伴しながら、インド・東南アジアへと交易活動を延ばしてゆくことになるのである。

## 2-2. ユーラシア外縁部の海洋交易—近代以降のアルメニア交易集団

アルメニア商人についていえば、近世以前の長距離・巡回交易と近代以降のそれとは大きく異なる。それには二つの要因があった。

一つは19世紀後半から20世紀初頭にかけての政治的要因である。具体的にはポルトガル帝国の衰退、オスマン帝国の拡大、サファヴィー朝とその後のガージャール朝やロマノフ朝の衰退、さらに後には19世紀末～20世紀初頭にかけての数度に及ぶアルメニア人に対するジェノサイドである。こうした変動はアルメニア商人に対する諸王朝の保護、アルメニア商人間の信用保証と交換交易の仲介者であった有力商人ワキール、商人宿と商品倉庫を兼ねた「フンドック」などを衰亡させ、アルメニア人によるそれまでの長距離・巡回・中継交易のネットワークをほぼ完全に分断してしまった。

第二の要因は、国際航路の開拓と新たなイギリス東インド会社のアジア進出である(Chaudhuri1978)。内陸ユーラシアでの巡回交易のシステムを分断されたアルメニア商人は19世紀以降の新たな国際的潮流に乗って、イギリス東インド会社のもとで海洋交易にシフトする。だがそれはイギリス東インド会社に「従属する」のではなく、アルメニア商人としての主体

性を保ちつつ、イギリス東インド会社の扱わない商品—貴金属や雑貨、穀物など—の交易活動(ポルトガル艦隊に付随したアルメニア海商もそうだが、私はこの形態を「随伴交易」と呼ぶ)であり、インド洋・ベンガル湾海域における港市商人集団として存続することになる。

## 3. 研究資料とその所在

1990年代から2000年にかけて、近代以降のアルメニア海洋商人に関する研究が始まり、次第に世界各地で関心が高まっている。だが問題は、うずもれていた史料の発掘とそれらの研究分析とがほぼ同時並行であり、新史料の発掘と既刊資料や公文書などに対する新たな分析視角もようやく紹介され始めたという状況である。

南アジア・東南アジア・東アジア各地の教会墓地や公墓にアルメニア人の墓碑が散見することはすでに19世紀末頃から知られている。特にインドのアルメニア人墓碑については近世の墓碑銘が在野のアルメニア人研究者セートの編纂した史料集(Seth1937, 1992)に断片的ながら収録されている。またその他の国・地域では1990年代から新たに民間組織による墓地遺跡・墓碑銘の調査とデータ化が精力的に進められている。その代表的な組織・資料を紹介しておきたい。

### A. 「BACSA=British Association for Cemetery in South Asia(南アジア墓蹟調査イギリス協会)」

イギリスの民間団体による旧英領インドに散在するヨーロッパ人墓碑の収集と墓碑銘のリストの作成である。基本的にはイギリス人の

墓碑を対象とするが、ドイツ・フランス・ロシア・スペイン・ポルトガル、アルメニアなどの墓碑も含まれる。私の入手した資料はペナンのジョージタウン郊外に位置する

Western Road Protestant Cemetery の墓碑リストである。墓碑ごとに氏名・生没年・生地・没地・国籍・年齢などが収録されている。

アルメニア人については、少なくともペナンの有力商人アンソニー一家の墓碑5基が記録されている。もっとも、アルメニア人は、必ずしもアルメニア教会だけではなく、カトリック、プロテスタント、ロシア正教、イスラームの墓地にも埋葬されていると推測される。

## B. 「FIBIS=Families in British India Society(旧英領インド関係イギリス人遺族協会)」

旧英領インド植民地に居留した軍人・軍属とその家族に関する墓碑調査であるが、イギリス国籍を持つアルメニア人、あるいは英国軍人として没したアルメニア人も多く、彼らはこの調査対象に含まれている。

## C. 「神戸市外国人墓地埋葬者リスト」

神戸居留地研究会会員の谷口良平氏による神戸外国人墓地の網羅的な調査に基づいて作成された 2040 基のリストである。このリス

トには埋葬者ごとに墓籍番号・姓名・性別・国籍・出生地・生年月日・没地・没年月日・年齢が収録されている。これらの墓碑は、カトリック、プロテスタント、ユダヤ教、ギリシャ正教、イスラーム教、ゾロアスター教・ヒンドゥー教！（一般に両宗教では墓葬の習慣はないのだが）の各地区に区分されている



図 4. 神戸外国人墓地宗教別地区図

(図 4)。アルメニア人については、墓碑リストの姓名と墓碑銘の刻文を照合して確認できたものが 6 基(プロテスタント地区 1 基

(図 5)、ロシア正教地区(1 基)、ブロック未確認 4 基(6 名?)。おそらくは未判読の墓碑銘を再調査すれば、より多くのアルメニア人墓碑が見いだされるかもしれない。また、横浜山の手外国人墓地には、アルメニア人墓碑はアプカー家 3 基の外に少なくとももう 1 基存在するのみである。



図 5. 神戸外国人墓地アラトゥーン墓碑

#### D. アルメニア人史跡の保存活動

歴史の振り返りと文化財保存の運動は近年アジア各地で注目されている。それらの一例として、アジアのアルメニア関係博物館を目指すシンガポールアルメニア教会付属のアルメニアミュージアム、ペナンのアルメニア関係史跡と墓碑調査に力を入れているマレーシア・ペナンの民間組織ペナン文化遺産保存協会 Penang Heritage Trust を挙げておく。

#### E. アルメニア人の家譜・族譜・族誌医療の編纂

アルメニアは 1991 年にソヴィエト連邦共和国の一員から共和国として独立した新生国であり、近代以降の在外アルメニア人(ディア

スポラ・アルメニアン)に関する研究もほぼ同時期に始まった。特にアメリカ・カナダ・インド・オーストラリアに定住する富裕層のアルメニア人による「ルーツ掘り起こし運動」ともいえる家族誌・家譜・家系図の作成が始まっている。それらのうち、例えば、香港で活躍し、アルメニア人初の爵位(Sir)を得たポール・チャターを記念したチャター家譜(Paul Chater Gallery, India)、明治期の横浜・神戸で商会・海運会社・ホテルを運営したアプカー一族の家譜(Apcar Genealogy, USA)、カルカッタを中心に商会を興したアラトゥーン一族の家譜(Arratoon Genealogy, USA)があり、それらの一部は電子データとして公開されている。

#### F. 公刊資料の再分析

日本・中国・ベンガル・海峽植民地などでは各地の英文機関名鑑(Directory)が公刊されており、それらの中にアルメニア人経営の各種事業・商会の一覧が含まれている。またこれらの地域・国では **Gazettee, Journals, News Papers, Factory Records** などの居留地・植民地資料が刊行されており、それら各種資料には、ごく断片的ではあるがアルメニア人に関する記録やエピソード、功績を紹介する記事が掲載されている。それらも副次的史料として利用しうる。

#### 4. 教会・街路・移動ルート

これまで、私の行ってきた現地調査と収集した教会関連資料をもとに、アルメニア教会と「アルメニア通り」の街路名が現存し、あるい

## <Armenian Church> and <Armenian Street> in Asia

- |   |                  |
|---|------------------|
| 1. 1611 Agra (Mausoleum in the Cemetery) (demolished) |                  |
| 2. 1697 <b>Chinsurah</b>                              | Armenian Street  |
| 3. 1712 <b>Madras</b>                                 | Armenian Street  |
| 4. 1724 <b>Calcutta</b>                               | Armenian Street  |
| 5. 1778? Surat (prior to 1579?) (demolished?)         |                  |
| 6. 1781 <b>Dacca</b>                                  | Armanitola       |
| 7. 1766? <b>Rangoon</b>                               | Armenian Street? |
| 8. 1796 Bombay(demolished)                            |                  |
| 9. 1824 Penang(demolished)                            | Armenian Street  |
| 10. 1835 <b>Singapore</b>                             | Armenian Street  |
| 11. 1831? Batavia(demolished)                         |                  |
| 12. 1927? <b>Surabaya</b> (transformed)               |                  |

\* 現存

Source: Seth (1937); Wright (2003); Singapore Armenian Street Foundation(2019)

表 1. アジアのアルメニア教会と「アルメニア通り」

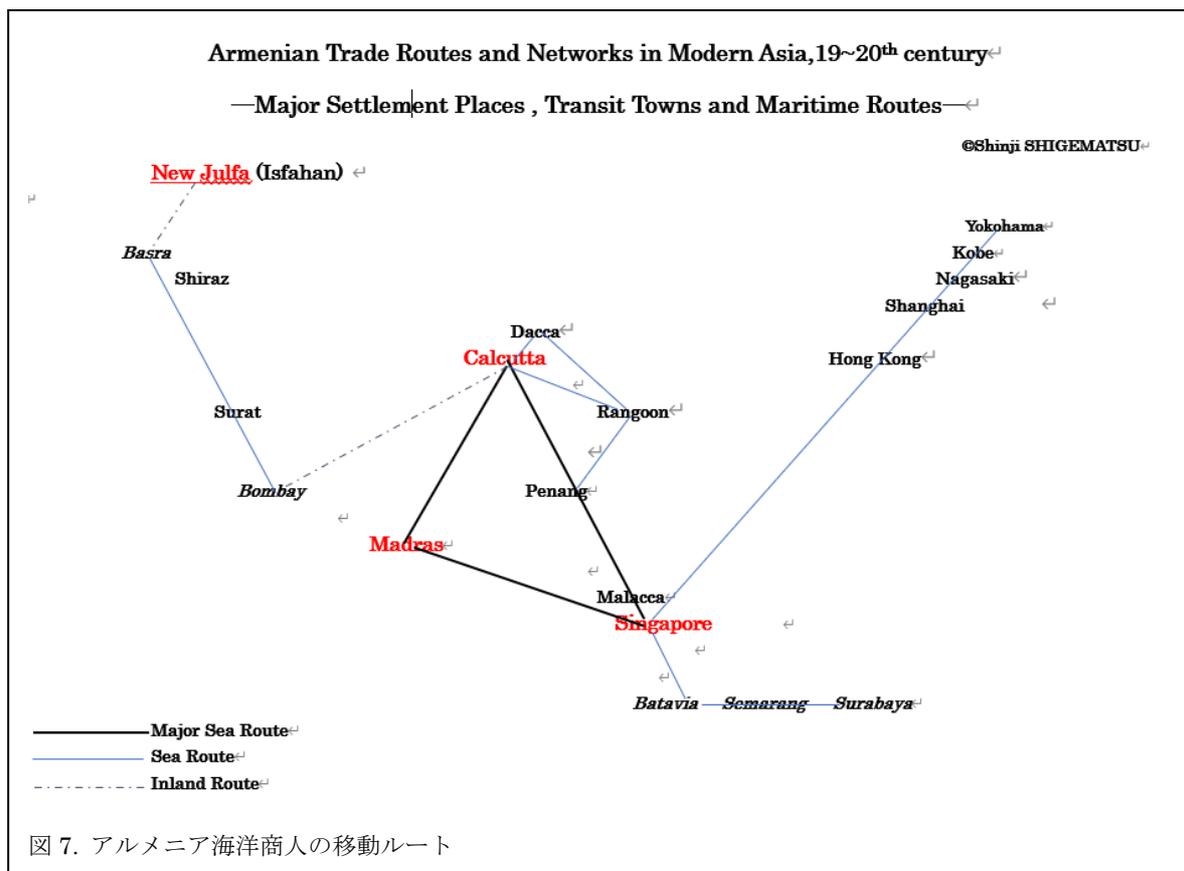
はかつて存在した地域をたどった (表 1)。

17 世紀～20 世紀初頭にかけて、南アジア・東南アジアには少なくとも 12 のアルメニア人関連の教会や聖廟が創建されたと考えられるが、これまでのところ、インド北中部アグラの、推定 1611 年創建のキリスト教大聖廟、最も新しいものは 1927 年頃に建造されたスラバヤ(ジャヴァ島)のアルメニア教会(現在は華人系プロテスタント教会に転用)である。これら 12 の教会のうち、8 つは南アジア(インド・バングラデシュ・ミャンマー)に、2 つはマレー半島に、2 つはジャヴァ島に創建された。香港・上海の教会・地名の存否については今のところ未調査であるが、横浜・神戸・長崎には存在しない。

「アルメニア通り」の地名が今日も残る地域は、確認した限りではチンスラー、カルカッタ(コルカタ)、ダッカ、ラングーン(ヤンゴン)、マドラス、ペナン、シンガポールにあり、マドラスやペナンでは有力なアルメニア人に因んだ街路も存在する(図 6)。



図 6. ペナン・アラトゥーン通り



聞き取り資料や公刊資料によってアルメニア商人の活動拠点を結んでいくと、近代以降のアルメニア商人の移動ルートが推定される(図7)。アラビア海・ベンガル湾・マラッカ海峡・南シナ海・東シナ海の港市を拠点にユーラシア外縁部の海域を広く周回しているが、とりわけ、カルカッタ・マドラス・マラッカ(後にはシンガポール)を結ぶベンガル湾・マラッカ海峡の海域が近代アルメニア海商の「ゴールデン・トライ・アングル」であったといえる。次に紹介するホヴァキム一家を始め、アジアのホテル王と呼ばれたサーキーズ兄弟、ペナンを拠点にしたアンソニ

一族(図8)、海運・商会・保険業を広めたアプカー一家も、この三角海域を中心に事業展開を行っていたのである。



図8. ペナン・A.A.Anthony Family 墓碑

## 5. シンガポールのホヴァキム家の事例から

上記の諸資料(教会・墓碑・家譜・新聞記事・名士録など)をもとに、シンポジウム報告では、シンガポール・マラッカ・マドラス(チェンナイ)・カルカッタ(コルカタ)の数家族のアルメニア人一族の事例を報告したが、小稿ではその一例としてシンガポールに定住したホヴァキム家の事例を紹介しておきたい。

ホヴァキム家(英語表記では Hovakim, アルメニア語音では Joaquim)は 19~20 世紀にかけて、シンガポールを中心にインド・マラッカ・インドネシア・イギリス・フランスなどで活躍した当時のマルチ・ビジネス一族であった。

シンガポールの中心地区オーチャードロードの東端から 500 メートル南にアルメニア通りが残る。この辺りはかつてシンガポール国立図書館であったが、現在は公園など公共施設に変わっている。アルメニア通りは南北 100 メートルほどの小路であるが、それに沿ってアルメニア教会地があり、39 基のアルメニア人墓碑がある(2019 年 12 月現在)。これらの墓碑にはラッフルズホテル



図 9. アグネス・ホヴァキム墓碑(シンガポール・アルメニア教会)



図 10. パルシク・ホヴァキム墓碑(シンガポール・アルメニア教会)

や E&O ホテルの創業者サーキーズ兄弟のほかにホヴァキム家の墓碑(図 9・図 10)がある。

シンガポールの国花となっているランの一種、ヴァンダ・ミス・ホヴァキムはホヴァキム家の長女アグネスに由来する。なぜ、どのような経緯で、アルメニア人アグネス・ホヴァキムが多民族国家で華人優勢のシンガポールの国花となったのか、その経緯は複雑で多くの論争があるが、この件についてはここでは触れずにホヴァキム一族の活動をたどることにする。

墓碑によれば、アグネスの父パルシクは生地マドラス、生年不明、1872年5月17日シンガポール没である。残念ながらこの一族にはホヴァキム家文書もパルシク自伝も残されていない。したがって詳細な一族史はたどりえない。だがシンガポール名士録や当時の新聞

(Singapore Chronicle, the Straits Times)には断片的ではあるが、この一族についての記事が掲載されている。また、オーストラリア在住のアルメニア人研究者ナディア・ライトはかつてシンガポールに居住していた数家族のアルメニア人家系について紹介している

(Wright2003)。これらの断片的な記録をもとに私が再編したものが「ホヴァキム家二代図」である(付図)。

パルシクはシンガポールを拠点に、カルカッタ、バタヴィア(現ジャカルタ)、ペナンに各種事業を展開しており、その中には、仲介人、リライアンス海事保険、ホロウエイ大衆薬品輸入会社、弁護士業、アプカー海運シンガポールなどを自ら経営、あるいはタンジュン・パガ船舶ドック会社、シンガポール鉄道会社、アプカー・ステファン不動産会社の共同出資者にも名を連ねている。

パルシクと妻ウレリア(アルメニア名ウルグ

ル)には11人の子供があり、そのうち女子は2人、男子は9人。女子はいずれも家庭人としてとどまったが、9人の男子の中にはイギリスの名門校に学び、シンガポール、マラッカ、カルカッタ、マラン(スマトラ)などの各地にわたり、その後は家業の商会を継ぎあるいは弁護士業を開業する者、ホテル業に従事する者、イギリス・フランスにとどまる者、シンガポールで代議士となり、のちに名士として名を挙げる者も現れた。

ホヴァキム一家二代の歴史から、近代ディアスポラ・コミュニティの典型が現れてくる。それらを要約すれば、次のような内容であろうか。

1. 「多子」：他のアルメニア人家族の事例でも、幼児死亡が多い
2. 「父系的」家族形態：女子は家庭、男子はイギリス名門校での教育
3. 「家族的」経営形態：多くは2親等による経営、家族企業体
4. 「多業種・業態」経営：交易・仲介人・保険不動産・弁護士・ホテル…
5. 「国際間・地域間」移動：東南アジア間、東南アジア・インド間、東南アジア東アジア間の移動

上記ホヴァキム一家二代の歴史が、東南アジアのディアスポラ・アルメニアンの代表的な事例とは必ずしもいえないだろう。だがホヴァキム一族の生存のあり方に見られる特徴が、ここでは詳細に紹介できなかったが、マラッカ・ペナン・カルカッタ・日本で活躍したアルメニア人有力者の間にも共通にみられるのである。

## おわりに、新たな「逃走の歴史」に向けて

権力の集約体である国家は、その国家体制や支配的なイデオロギー—前近代の専制主義や資本主義や社会主義、共産主義など—を問わず、自生的に強大化し拡張するメカニズムを持つ。そのことは21世紀に入ってグローバル化の中で一層明確に露呈しつつある。この趨勢は今後も一層強まっていくだろうし、強大な武力や覇権をもたない弱小民族やコミュニティは其中でますます翻弄されるだろう。

ある統計によれば、アルメニア民族は、「本国」のアルメニア共和国の人口(約300万人)よ

りも海外離散の人口(推計300万人強)が多いという。「国家」とは何か、民族の在りようとは、を考えなおす一つの事例となろう。

近代ディアスポラ・アルメニアンは、武力や覇権によって対抗できない社会集団がいったいどのように生きてゆき、民族の持続をどのように図ってきたのかという一つの示唆を与えるのではないか。それはポジティブな意味での「逃げの歴史」とでもいえようか、逃走のあり方とその方向性から21世紀の国際社会を考えることができるのではないかと思う。

---

## <参考文献>

- 小牧昌平監訳・渡辺大作訳、ジョージ・ブルスティアン著、2016『アルメニア人の歴史、古代から現代まで』藤原書店
- 重松伸司、1993『マドラス物語』中央公論社
- 重松伸司、2012『マラッカ海峡のコスモポリス、ペナン』大学教育出版
- 重松伸司、2016『移動と交流の近世アジア史』守川知子編著、北海道大学出版会、所収
- 重松伸司、2017『追手門学院大学国際教養紀要』10号所収論文
- 重松伸司、2019『マラッカ海峡物語』集英社
- 中堂幸政・山影進・田村愛理訳、フィリップ・カーティン著、2002『異文化間交易の世界史』NTT出版
- 松村高夫・矢野久編著、2007『大量虐殺の社会史—戦慄の20世紀—』ミネルヴァ書房

- Aslanian, David Sebouh, 2011, “From the Indian Ocean to the Mediterranean”, *the Global trade networks of Armenian Merchants from New Julfa*. University of California Press.
- Bakhchinyan Artsvi, 2017, “The Activity of Armenian merchants in International Trade in Regional Routes”, *Regional Roots? Cross-Border Patterns of Human Mobility in Eurasia*. Eds. By So Yamane and Norihiro Naganawa, 北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター
- Chaudhuri, K.N., 1978, *The Trading World of Asia and the English East India Company 1660-1978*, Cambridge University Press.
- McCabe, Ina Baghdiantz, 1999, *The Shah’s Silk for Europe’s Silver, The Eurasian Trade of the Julfa Armenians in Safavid Iran and India(1530-1750)* University of Pennsylvania.

Moosvi Shireen, 1998, “Armenians in the Trade of the Mughal Empire during the Seventeenth Century”, *Proceedings of the Indian History Congress*, vol.59.

Seth, Mesrovb Jacob, 1992:1937, *Armenians in India from the Earliest Times to the Present*. Asian Education Service,

Arnold Wright and H. A. Cartwright (eds.), 1908, *Twentieth Century Impressions of British Malaya.*, Lloyd’s Greater Britain Publishing,

Wright, Nadia, 2003, *Respected Citizens: the History of Armenians in Singapore and Malaysia*, AMASSIA Pub.

(付図) **Genealogy of The Joaquim (Hovaqim) Family(c1800~1950's)**



Sources: 1 Wright (2004), chap.30, pp.218~239. Some contents are not certain due to no basic sources.;

2 Seth (1937)

©Shinji SHIGEMATSU